

ら、新聞・ラジオ・テレビ等通じて広告を出させて、その手数料で生活しているのですが、企業自体が文化的なものに投資しないと企業名が伝わらないと、よくな自覚を持って来ているんですね。だから、私は一銭も出さないのに日本地名研究所へ多額の寄付をして貰いましたし、向こうへは二十名位の講師陣を連れて行きましたが、色々と面倒を見て貰ったんです。それはやはり地名という問題を通して、文化という問題がいかに大切かということ世間にPRしてやるんですね。

地名の不変性

水俣に、為朝神社というのが浜の八幡宮への通り路にあるんです。どうして為朝を祀っているのか調べてみたら、為朝というのが、船津から船出して琉球へ行ったという伝説があるんです。このことは『肥後国誌』にも出ていて、滝沢馬琴も書いてます。そのことで南方の沖繩に関心を持ちまして、編集の仕事をしている時も、何度か沖繩特集を組みました。仕事を止めて物書きになったとき、沖繩通いを始め、何十回か行きました。沖繩は、日本の古い時代の姿が、日本の本土よりはるかによく残ってますね。それで実感として、それこそ小さい時の水俣の姿が、そして古代の姿がよくわかるんですね。それは、つまり民俗学とかそういう幾千年と小さい生活をしている庶民達が続いている慣習だとか感情だとか仕来りだとか考え方だとか、そういうものをおかなくてはいけないということですが、それは日本の伝統の岩盤だと考えてよいのです。それで変わらないものの中で何が一番変わらない

かということ、それは地名です。地名というのは、人間の共同生活があるときには必ず出てくるんです。これは縄文時代あるいはそれ以前からあります。何故かという、それは、合言葉がないと暮らせないわけ、付いているわけです。しかも人は、古代なり古事記なり日本書紀なりに出てきた地名を、今だに使っているんです。普通ですと、奈良時代に使った木器や用具やらは、発掘した場合、文化財としては非常に貴重なものかも知れませんが、現在使用することは出来ませんが、でも地名は、現在もなお使用するという点で、一番古くて新しく、その間絶えず持続している。それこそ、千年以上毎日のように人が使っているのです。しかも、地名の小字とか何とかの区域とかいうのは、奈良時代なら奈良時代がそのまま残っているんです。例えば条理制というのは、奈良県の条理制の区間が、今もメートルも変わらずきちんと残っています。その中で人が生き死に代々入れ替わりしながら、同じ面積のところを同じ呼称で呼びながらやってくるという伝統的なものです。しかし、最近町村合併やら何やらで、だんだんとそういう地名がなくなっていく、特に小字の場合著しいようです。

快適な地方の生活

先日福岡から高速道路を通って熊本へ行きましたが、周辺は立派な家が建ってましたし、高速自体も快適でした。今は地方にいて、不便なことはほとんどないでしょう。本屋さんだって沢山あるし、それに県立劇場をはじめとしていろいろな施設も充実してきましたね。先日建てられた伝統工芸館などはいいですね。昔

ながらの伝統工芸品を後世に伝えるためには、あのような施設は是非必要ですね、とにかく、もう東京よりも、はるかに九州あたりの生活の方が、快適ですよ。
熊本弁はよか!
熊本弁で話していると細かいニュアンスも正しく出来ますね。とにかく、言葉を話すのが楽しいですよ。東京では、自分の意志を伝達するだけであって、楽しくないですよ。言葉を使うことの楽しみみたいなものが、あんまりないですね。一方、熊本弁でしゃべると、色んなことがしゃべれます。「よか!」と言うだけで楽しくなりますね。九州へ行く時、博多あたりから、「そぎゃんね」とか「よかたい」とかいう言葉が聞こえてくるんですが、もうそれだけで楽しくなりますね。

地名は財産

熊本では、特に地名を変えないで大切にしたいですね。それでも変えなければならぬような場合、もとの地名を知らせる表示板みたいなものを作って、前の地名と新しい地名との関係をはっきり関連づけられるように、つまり認識できるようにして欲しいですね。とにかく地名は財産ですから、大事にして欲しいですね。どこでも生活が画一化している現在、その土地の特徴をよく表わしているのは、地名ぐらいのものになっていきますから……。



私の国はパングラティシユ(旧東バキスタン)です。私の国も熊本県と同様に農業が盛んで米、野菜、果樹、シユウト(繊維)等が生産されています。
私は現在国の農業開発公社(工イト農場)で農場全体の監督と野菜、果樹の試験栽培をしています。野菜の勉強をするために熊本県国際農友会を通じて本年の七月一日から来年の三月まで熊本県農業試験場園芸支場で研修中です。私は、これまで県内の野菜農家や産地を訪れて、農家の教育程度や技術水準の高いこと、又研究熱心なことに驚きました。
次にピニールハウスでのスイカ、メロン、トマト、キュウリ等の栽培が多いことです。私の国ではピニールハウスは試験的に二〇〇〇位あるだけです。
また、私は各種の会議やパーティーに参加させていただき多くの人と友達になりましたが、どの会合でも、強く印象づけられることは、皆さんからの「何か困っていることはありませんか」という優し



ムハムド・ディン イマム

い言葉です。そして、パーティーに出席しては、男女同席して食事をしたり、酒を飲んだり、話をしたりするなど本場に楽しい生活をしています。しかしながらこのことの良い否は別として、私の国では宗教的なこともあつて男女の同席や生の肉、魚、肉でも豚、馬を食すること、アルコール類を飲むことは固く禁じられていますので、多少面くらつています。
さらに、日本では女性が各種の職場に進出していることにも驚いています。私の国では女性の就労の場は病院、学校、銀行などの極く一部に限られていることもあり、殆んどが家の仕事です。
私は熊本に来て四ヶ月になりこの間熊本城や市立博物館の他阿蘇、天草、球磨などへ行きましたが、熊本県は歴史があり文化的で目つ自然が豊かな県だと思います。
私は国へ帰つた後も農業技術をはじめ、学んだいろんなことを国のために役立てたいと思います。
熊本での人や自然とのふれあいは生涯忘れられないでしょう。

むかしむかしのこと。三角に太田尾と呼ばれる小さな村がありました。その村の庄屋さんの所に、兵作という走り使をする若きやあもんが居ました。
太田尾村は、山が海岸まで迫っていますので貝堀りなどは出来ません。ですから隣り村の波多村まで峠を越えて貝堀りに出かけていました。波多は入江が深く浪静かな浦で、浦には小島も浮び、頂きには祇園精舎を守る牛頭大王が祭られていました。
ある日のこと、太田尾村の兵作が、庄屋さんの許しを得て波多浦に貝堀りに行きました。
ひとのよい兵作は、よろこびいさんで出かけました。天気は良いし、鼻うたまじりに宇曾の峠のお地藏さまに、ペコンと頭をさげ、ピョンピョンはねるようにして宇曾の谷を下り波多浦に着きました。丁度湖のあんばいもよく、干潟に入った兵作は、せっせとつせと掘りました。持って来たものの中は、もういっぱいになってしまいました。「こぎやんとれたけん、もうよかばい、だんなさんもうこばすと、こん場所は、けつして人にはおしえんぞ」とひとり言を言いながら、再び宇曾谷を登って行きました。



みすばらしい旅の僧が通りかかりました。旅の僧は、兵作の貝を見ると、「小僧さんや、この愚僧にその貝を少しばかり頂けんかな」とねんごろにたのみました。兵作は庄屋さんにはめられた一心、少しもやりたくはありません。
そこで「こん貝はいしきやあだもん、いしきやあは喰れんけん、あげられせん」といきました。旅の僧は、残念そうに何処となく消えて行きました。兵作は、こらあいつまでんおるとだるが来るかわからん、はよもどろ、とめごをかかえあげようとする、とどうでしょう、持ち上がりません、めごの中の貝は石貝になっているではありませんか。
さあー大変です。兵作は、もう泣き出さんばかりです。「お地藏さん、とぎやあんかして下はりませ、もう決してうそは言いません、欲ばりもしまつせん」と三拜九拝、めごの中の貝は皆そこにはおり出して太田尾村に下って行きました。それからというもの、峠の地藏さんを「いしきやあ地藏」と呼んでねんごろにお祭を始めたということです。
今でも宇曾谷からは、その時の捨てた貝の化石が出土しています。

三角町 小崎龍也著
※これは「兵作咄」として伝えられているもの一つ